一人ひとりの子どもに重大な関心を寄せる教育

センター協力研究員（立教大学文学部教授）　奈　須　正　裕

みんなちがって，みんないい

いうまでもなく，金子みすゞの「わたしと小鳥とすずと」の最後の一節である。そしてもしかすると，ここ10年の間，日本の教育界で一番多く引用されたフレーズではないかと思う。これほど，一人ひとりの子どもを大切にする教育のあり方をわかりやすく，しかも的確に洞察させる表現はない。少なくとも現場の水準においては，この言葉こそが90年代日本の学校教育を実質的に牽引してきたと思えるほどである。

ところが，ここに来て心配な事態が発生している。無思慮な人々よって「みんなちがって，みんないい」が曲解され，残念なことに放任や迎合といった，誤った教育のあり方を生み出してしまっているのである。

「だって『みんなちがって，みんないい』んでしょう。要するに好き勝手にさせて，放っておけばいいんですよね。」

「『みんなちがって』ることが『いい』んだから，誰一人として同じことをしちゃいけないんですよね。」

これらはもちろん子ども中心の教育などではないし，当然のことながら，こんなあり方では子どもはまともに育たない。それこそ，授業崩壊，学力低下は必至である。しかし，残念ながら誤解や曲解は後を絶たず，ついにはこのような間違ったあり方を本来のあり方であるかのように勝手に思い込み，批判してくる人まで現れる始末である。「だから子ども中心なんてダメなんだ。子どものいうことなんかに耳をかすことはない。ぎゅうぎゅう教え込めばいいんだよ。」

かくして，「みんなちがって，みんないい」の本来の意味からは遠く離れた二つの教育，放任・迎合と強制・管理の教育が再び力を持とうとしてきている。

対話の型に表れる子どもへの関心

放任・迎合と強制・管理は，一見正反対のように思える。しかし両者は，一人ひとりの子どもに対する無関心という点において共通の根を持っている。どちらも，子どもへの眼差しは冷たい。

一方，本来の子ども中心の教育は，「みんなちがって，みんないい」という表現に端的に表れているように，一人ひとりの子ども，そのすべてをまるごと受け止め，今この時を大切にしながら，ともに生きていこうという，暖かい眼差し，そしてだからこその強靭な意志を基盤とする。もちろん，今を大切にともに生きていくということの中には，時に鋭い対決を迫り，そこから一歩も逃がさないという厳しさをも含み込む。だからこそ，本当の子ども中心の教育の下では，テスト等で測定される狭義の学力だって十分に保障しうるのだ。つまるところ，子ども中心の教育とは，徹底したその子への関心によって貫かれているのである。

そんなことに思いが至っていた矢先，富山市立堀川小学校の校内研究会に参加してはっとさせられた。研究授業後の協議会での，先生方の対話に独特な型があることに気づいたのである。

「今日のあの場面で，△△という発言をせざるを得なかった○○さんなんだなあ，と思って見ていました。」

「○○さんが△△という発言をした」のではない。「△△という発言をした○○さん」なのである。この違いは大きい。

授業におけるたった一つの発言，ほんのちょっとした動きをも，その子の存在に引きつけ，その子が今日，そこで懸命に生きていたことの証しとして理解していこう，さらにそれを基盤に次の指導を構想していこうとの姿勢が，このような独特な対話の型を生み出したのではないか。まさに「みんなちがって，みんないい」であり，一人ひとりに重大な関心を寄せる，子ども中心の教育を体現している。そして，このような暖かくも真摯な眼差しの日常化，実践化を具体的に模索することこそ，今緊急に求められている課題だと思うのである。